

序 ハロルド・ピンターの生涯

ハックニー生まれの少年

ロンドン金融街、シティ・オブ・ロンドン北東部のリバプール・ストリート駅から列車で十分ほど行ったところに、ハックニー自治区が広がっている。ストリートアートが有名なこのエリアは、特に二〇一二年のロンドン五輪前後から再開発が進み、近年では洒落たカフェやレストランも少なくない。そしてそこは、劇作家ハロルド・ピンターの出身地でもある。

ピンターが生まれた一九三〇年、ハックニーは工業地帯であり、今以上に貧困層が多かった。そして今でもそうだが、住民には移民やその子孫が多く、ピンターもまたユダヤ系の家庭に生まれている。両親——ジャックとフランシス——は、いずれもロンドン生まれだが、祖父母のうち三人

はポーランド出身で、母方の祖父のみオデーサに生まれ、一九〇〇年前後にイギリスへと移住した。どちらの祖父も服飾関係の仕事で生計を立てており、父親もまた婦人服の仕立屋として働いていたが、これはロンドンに住むユダヤ人に典型的な職種であった。裕福な家庭ではなかったものの、ピントーは一人っ子として、祖父母や両親の愛情を一身に浴びていた。

もともと、彼はずっとハックニーにいたわけではない。第二次世界大戦が勃発した一九三九年、ナチス・ドイツによる空襲から逃れるため、彼はコーンウォールへと集団疎開した。住み家や家族から半ば強制的に引き離されたこの経験は、彼にある種のトラウマを与え、その後の作家としての生き様に大きな影響を与えたと考えられる。ピントーはその後も一九四一年にレディングへ、一九四四年にはノーフォークへの疎開を強いられた。それでも彼は死の危険に何度か直面したようだ。彼は一九四四年、ロンドンに戻って来たその日に、落ちてくる爆弾を路上で目撃したと、一九六七年の『ザ・ニューヨーカー』におけるインタビューで語っている。さらに、ハックニーの自宅の裏庭に火が燃え移り、自宅から避難したこともあった。彼にとって少年時代の記憶は、戦争の恐怖と切り離せないものであったに違いない。

もう一点、ピントーの幼少期の時代はユダヤ人に対するファシスト的な差別的行為が横行していた。友人たちと一緒にハックニー周辺を歩いていたときに、不良の集団に後をつけられ、喧嘩になりそうになったこともあったらしい。暴力的な空気が日常的に漂い、危険な目に遭うこともあった。

ハックニーはまた、その後のピンターの人生に影響を与える人間関係も生み出した。少年時代、ハックニー・ダウンズ・グラマー・スクールで出会った友人ヘンリー・ウルフは、ブリストル大学大学院に進学後、演劇科で上演する作品の執筆をピンターに依頼した。その結果として一九五七年に上演されたのが、第一作目となる『部屋』である。ウルフはまた俳優として、一九七三年にBBCで放送されたピンター作のテレビドラマ『独白』にも出演したが、その後カナダに移住している。それでも、ピンターが亡くなる二〇〇八年まで、その友情は絶えることがなかった。

作家人生の萌芽

では、劇作家デビューする前のピンターは何をしていたのか。そもそも彼が文学や映画、演劇にのめり込んだきっかけも、やはりハックニーにおける出会いだった。母親の読書好きを見て育ったピンターは、十二歳より詩を書き始め、やがて地元の図書館でドストエフスキー、ヴァージニア・ウルフ、D・H・ロレンス、ジェイムズ・ジョイスなどの小説を借りて読み耽るようになる。また彼は、十四歳のときにハックニーの友人たちと映画クラブを作り、シュルレアリスムの影響を受けたルイス・ブニュエルの作品などを好んで鑑賞した。一方で演劇に関しては、ハックニー・ダウンズ・グラマー・スクールの教師ジョー・ブリアリーの影響が大きい。一九四七年、ブリアリーは学

校でシェイクスピアの『マクベス』の上演を計画し、主役のマクベスにピンターを抜擢したのだ。卒業後、ピンターは本格的に俳優を目指す。

しかし、その道は順風満帆とはいかなかった。一九四八年、彼は大学へ進学せず、奨学金を得てロンドンにある王立演劇学校、通称RADAに入学する。しかしRADAの雰囲気や演劇論に馴染めず、次第に行かなくなり、やがて退学してしまう。もともと、俳優の道を諦めたわけではなかった。ピンターは地方都市を巡業する劇団で俳優としての活動を始め、一九五一年からはアイルランドを巡業する。ちなみに、この劇団で共に活動していた俳優のポーリーン・フラナガンによると、ピンターはこのころイエイツの詩に熱中していたらしい。

その劇団を辞めた後もピンターは俳優を続け、一九五三年にはシェイクスピア俳優のドナルド・ウルフィットが主宰する劇団に参加した。ピンターはウルフィットと馬が合わなかったようで、あまり長くは在籍しなかったが、この劇団で出会った仲間に、のちに劇作家となったロナルド・ハーウッドがいる。彼の代表作の一つは一九八〇年初演の『ドレッサー』だが、この作品は自身とウルフィットの関係を題材としている。ピンターにとってハーウッドは、俳優をしていた若い頃からお互いを知り、劇作家となった後も信頼し合える同業者だったようだ。一九九五年には、ハーウッド作『テイキング・サイズ』の演出をピンターが務めている。二人はプライベートでも良き友人関係を築いていたが、お互い劇作家として名声を得た後は、国際ペン・クラブの活動で、抑留されてい

る作家たちのための抗議運動を共に行っていた。

読書体験や映画鑑賞、俳優業は劇作家としてのピンターを形成する根幹となる。一九五四年初頭からはデヴィッド・バロンというステージネームを使用し、アガサ・クリステイ原作の舞台などに出演していた。詩や小説を書いてはいたものの（その小説は長い時を経て一九九〇年に『こびとたち』というタイトルで発表されるが、それ以前に一九六〇年にはそこから抜粋した同名のラジオドラマが放送されている）、生計の源はあくまでも俳優活動であった。

劇作家になる前のピンターについて、記しておくべき重要事項が他に二つある。RADDA入学と同じ一九四八年、ピンターに召集令状が届いた。当時は、第二次世界大戦が終わりを迎えたとはいえ、ソ連によって西ベルリンへ繋がる道路や鉄道が封鎖されるなど、冷戦の危機が本格化しつつあった。イギリスは大戦勃発前から徴兵制を敷いていて（廃止は一九六〇年）、「良心的兵役拒否」の制度も認められていたものの、申請しても拒否される可能性があり、しかもその場合は法令違反として逮捕される危険もあった。それでもピンターは躊躇いなく良心的兵役拒否を申請する。そして一九四九年に召喚された軍事裁判において、彼は戦争行為に加担することへの拒否感をはっきりと示した。その後もう一度開かれた裁判において申請は拒否され、刑務所への収監の可能性もあったが、最終的には罰金刑で済む。

ここで注記しておきたいのは、ピンターの良心的兵役拒否は宗教的理念に基づいていたわけでは

ないという点である。たしかに彼の家庭はユダヤ系であり、特に父親の家系は正統派ユダヤ教徒だったものの、彼自身はユダヤ教を信仰していたわけではない。彼の行為は政府に対して反抗の声を上げるといふ政治的主張であり、その後の作家人生を予感させるものであった。また彼は、遅々と進まず、真実を歪められ、ときに理不尽なことを言われる裁判を通して、カフカの官僚主義の不条理さを痛感したようである。

もう一つ、私生活上の変化があった。一九五六年に、彼は俳優のヴィヴィアン・マーチャントと結婚する。演出家ガイ・ヴァーゼンによると、彼が演出した舞台版『ジェイン・エア』において、ヴィヴィアンがタイトルロールを、ピンターが相手役のロチェスターを演じ、その共演がきっかけとなって交際に発展したようだ。なお、ピンターが非ユダヤ教徒の女性と結婚することに両親は動揺し、式にも姿を見せなかった（しかも彼が結婚登記所を予約した日は、ヨム・キプルの祭日、つまりユダヤ教の贖罪の日にあたる。祭日にあたるということを、彼はすっかり忘れていたらしい）。また、この二人はいわゆる格差婚であり、ヴィヴィアンは出演舞台で主演を張る一方、ピンターは脇役を務めることが多かった。友人ウルフが劇作をオフアーしたのは、そのような頃である。

苦難を経て

ピンターは劇作家としても最初から順調だったわけではない。初めての三幕劇『バースデイ・パーティー』は一九五八年四月からケンブリッジ、ウォルバーハンプトン、オックスフォードを回り、ここでは好評だったものの、ロンドンのリリック・ハマースミスでは酷評され、わずか数日で打ち切られてしまう。その頃の批評家や観客は、ジョン・オズボーン作で一九五六年初演の『怒りを込めて振り返れ』のような新しい傾向を受け入れつつも、それまでのノエル・カワードやテレンス・ラティガンに代表される、登場人物の背景や動機が比較的明瞭に説明される芝居をいまだに好む傾向にあった。そのようななかにあつて、意味や理屈の余白が多いピンター劇は、ある種の戸惑いを生んだのである。

もつとも、ピンターを評価する声もゼロではなく、作家としての仕事も徐々に増えつつあつた。『サンデイ・タイムズ』紙の大物劇評家ハロルド・ホブソンは『部屋』も『バースデイ・パーティー』も絶賛しており、当時影響力があつた演劇誌『アンコール』でも、ピンター劇が紹介された。また『ダム・ウェイター』は、ロンドン上演よりも前に、フランクフルトで一九五九年に初演され、同年には『かすかな痛み』もラジオで放送されている。一九六〇年三月には別のラジオドラマ『夜

遊び』が放送され、同年四月にはテレビドラマ化された。こうした仕事を得られたのは、彼のエージェントであるジミー・ワックスの功績もあるだろう。ワックスは当時既に影響力のある人物だったが、ピンターは一九五七年に友人の紹介で彼と知り合い、『部屋』を高く評価したワックスからの提案で契約を結ぶことに成功する。それでも、この時のピンターの本業はどちらかと言えば、まだデヴィッド・バロンとしての俳優業であり、金銭苦にも喘いでいた。一九五八年には息子のダニエルが生まれたこともあり、知り合いのプロデューサーに金を送ってもらうなどして何とかやりくりしていたようだ。なお、この一九五八年に『温室』という戯曲も執筆しているが、この作品は一九八〇年になるまで日の目を見なかった。

ピンターが大きな名声を得たのは『管理人』である。一九六〇年四月にロンドンのアーツ・シアターで幕を開け、その後ダッチェス・シアターに移ってロングラン公演となり、そのうち四週間のみではあるもののピンター自身もミック役として出演している。その作品の人気はロンドンにとどまらなかった。一九六一年にはブロードウェイのライシアム・シアターで上演され、一九六三年にはピンター自身が脚本を担当して映画化されている。また、その成功は経済的な安定をもたらした。『管理人』でデヴィスを演じたドナルド・プレザンスによると、ピンターはその時期に車を購入したらしい——自身は運転できないにもかかわらず。

飛躍の六〇年代と盟友たち

この時期から、ピンターの活動の幅はさらに広がっていく。彼は時折、自作の演出を務めるようになり、一九六〇年には『部屋』を、一九六四年には初演時に酷評された『バースデイ・パーティ』を演出して再演している。また彼は映画の脚本も手掛け始めた。ロビン・モーム原作で一九六三年公開の『召使』や、ペネロピ・モートイマー原作で一九六四年公開の『女が愛情に渴くとき』、アダム・ホール原作で一九六六年公開の『さらばベルリンの灯』、ニコラス・モーズリー原作で一九六七年公開の『できごと』の脚本などを担当し、『召使』と『できごと』は自ら出演もしている。また、この二作品はジョーゼフ・ロージャーが監督を務めた。ロージャーは赤狩りの影響で一九五三年にイギリスに亡命した人物で、この『できごと』でカンヌ特別映画祭審査員特別グランプリを受賞している。

六〇年代前半に限ると、テレビドラマの脚本も多い。一九六〇年の『ナイト・スクール』の放送を皮切りに、一九六一年には『コレクション』が、一九六三年には『恋人』が放送されている。さらに一九六五年には、ピンター自身が書いた短編をもとに、BBCで『ティー・パーティー』が放送された。